

寺三社權現鳥居の傍にありて、此猫を求るもの夥し、此事兒女輩といへども、心ある人は用ひず、まして大人の駭くべきにあらずといへども、此頃は丈夫も竊にこの猫をかりて、祈りけるもこれあるよしなりしが、四五年にして此噂止みたり。○中 夏の頃より神田松枝町なる大工保五郎が畜猫鼠を愛して乳をふくませ、我うみ落せし小猫とともに養育す。

〔松屋筆記〕四猫をなやませし童

齋藤謙が談に、靈巖島にすめりしころ、隣の家に伊豆の新島ニヒジマよりめしおける童ありけるが、垣下に猫の晝寐せしを見て、息を吹引フキヒキけるに、やがて猫くるひ出てめぐりなどするを見きようじけり、謙あやしみて、そはなにぞのわざにかととひければ、童いらへいふやう、こは猫に限れる事にあらず、何にても生類の寐て息を外へ吐とき、此方の息を吸彼が息を引時、此方の息を吐やりて、かく息を合すること五度に及時は、必狂出るなり、五度に滿ざらん内、彼が走去などしたらんにはせんすべなし、五度息を合たらんには狂廻ことうつなし、かくて息を合する間は、いつまでもこゑを立すして、おなじさまに狂居れど、此方の息を止むれば、とみにもとのごとくなりて、走行なりといへりとなん、今按に狐狸などの人をうなすといふも、かゝるわざするにや、

〔北越雪譜初編〕下泊り山の犬猫

我が隣驛、關にちかき飯土山に續く東に、阿彌陀峯とて樵する山あり、村々持分の定あり二月にいたり、雪の降止たる頃、農夫ら、此山に樵せんとて、語らひあはせ、連日の食物を用意し、かの山に入り、所を見立て、假に小屋を作り、こゝを寢所となし、毎日こゝかしこの木を心のまゝに伐とりて、薪につくり、小屋のほとりにあまた積おき、心に足るほどにいたれば、そのまゝに積おきて、家に歸る、これを泊り山といふ。山にとまりぬて事をなすゆゑ也○中略ひとゝせ、泊り山したるものゝかたりしは、ことし二月、とまり山せし時連のもの七人、こゝかしこにありて、木を伐りて居たりしに、山々に響くほどの